

# 歩キ目デス & 足ラテス

Vol.50

さん ば がわたい  
“三波川帯”

青石のルーツを訪ねて

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー

私たちの周辺には、様々な風景が広がっているが、今回は、その中で俗に「伊予の青石」と呼ばれる石たちが醸す風景について。

R11号線の東予方面を走ると、西条市から新居浜市にかけて、時折り青石がゴロゴロころがっていたりする光景を見かける。それは、石屋さんの商品置き場だったりするが、実は四国には、「阿波の青石」「伊予の青石」という二つの世界が存在する。そして、それら徳島県と愛媛県を結ぶキーワードは地層で、その名を「三波川帯」と言う。

もう少し詳しく、青石の風景を具体的に追ってみよう。愛媛県で



徳島城の石垣



吉野川上流の河原



徳島・民家の青石の使われ方



佐田岬半島・伊方町大久の砂浜

は、佐田岬半島が概ねその青石で形成されている。瀬戸内海によく見られる白砂青松という言葉は、松枯れで久しく見ない光景となった組み合わせだが、主体となる花崗岩が砕けて砂となった浜がスナワチ「白砂」である。その風景に比べて、佐田岬のそれは青味がかっていて、こちらは緑泥片岩など青石の砂で出来ている。つまりは「三波川帯」の地層が半島を覆っている。

西へ行けば海を渡って九州佐賀関。そこで地層は一旦消えるが、目を東に転じ、地図上で、三波川帯の全体像をたどってみよう。八幡浜市、大洲市、内子町、伊予市中山町などはそうしたライン上でつながり、従って大洲城の石垣は、まぎれもなく青石である。少し飛んで、西条市、新居浜市、四国中央市のそれぞれ高知県境をまたぐように続き、更に徳島県は吉野川流域から和歌山に渡り、紀ノ川から伊勢二見ヶ浦を抜け、対岸豊橋辺りから天竜川を北上、諏訪湖に至り、フォッサマグナ（糸魚川構造線）で消える。

そして再び顔を出すのが、群馬県藤岡市鬼石町辺り。

風景として眺めてみよう。新居浜の別子ラインや国登録文化財となっている山根スタンドの石垣、大歩危小歩危の峡谷、徳島城の石垣、お向かいのご三家紀伊の和歌山城もやはり青石。西条陣屋三万石は紀州の分かれだから、何と青石つながり。あの有名なお伊勢さんは二見が浦の夫婦岩が、これまた青石。そんな具合に、分かり易い風景イメージでも充分に青石景観の連なりが堪能出来る。

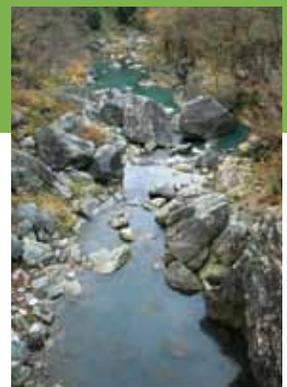
さて、以前から筆者は、その地層名称である三波川という固有名詞らしきものが気になっていた。まさか相撲取りの名ではあるまいから、どこかの川の名称ということになるが、それが上記の鬼石町になっていて、まさに三波川という地名が存在する。勿論川の名で、関東太郎の異名を取る利根川の上流部、神流川のそのまた支流が三波川。丁度、神流川は群馬、埼玉県境に位置し、“三波石峡”という溪谷美を形成、そこに産する青石は、古来から“三波石”として庭石などに珍重されてきたらしい。近くには長瀨峡（埼玉県）もあ



神流川の河原石



三波石の盆



三波石峡

り、こちらは荒川の上流となるが、やはり青石景観が見事らしい。という訳で、歩キ目デスは現地「三波川」に飛びました。愛媛に伸びる地層の命名の元を訪ねて。鬼石町は、幹線沿いで見ただけでも石屋だらけの町だった。そして、川はやはり内子石畳の麓川や、西条の加茂川、あるいは吉野川上流と同じ、我々にはどこか懐かしい青石ゴロゴロの川床でありました。

命名者は、安政三年生まれの地質学者で当時の東京帝国大学教授小藤文次郎。明治21年の論文発表により、その名「三波川結晶片岩」が命名され、誕生した。日本の変成岩研究のスタートとなった歴史の綾が、関東で命名されたばかりに分かりづらかった「三波川帯」のルーツに納得し、あらためて周辺の魅力的な青石を眺めている今日この頃。そう言えば、四国で三波川帯に南接する秩父帯やその間の御荷鉾帯なども、埼玉、群馬のほど近い地名が採用されている。